

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 北九州市 】

学校名【 北九州市立城南中学校 】

1 実践テーマ	I ・ II ・ III ・ IV ・ V （複数選択可）
2 実施対象者 (学 年 ・ 人 数)	全校生徒 144名 地域の方々 2名 保護者 10名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (保健体育科・総合的な学習の時間) ② 行事名 (文化体育週間) ③ その他 (家庭教育学級) (2) 地域における活動 ① イベント名 (文化体育週間 家庭教育学級) ② その他 ()
4 目 標 (ねらい)	・オリンピック・パラリンピックについて学び共生社会の実現にむけ自分たちにできることや、心がまえについて考える。 ・オリンピックのメダルには北九洲の会社の技術が生かされている。持続可能な社会を担う生徒たちがオリンピック・パラリンピックを様々な視点から学ぶことで、新たな発見や学び、北九洲のすごさを実感させる。
5 取組内容	取組① 今までの取り組みについての振り返りと、オリンピック・パラリンピックの現状についてオリエンテーションを行った。 一昨年度はオリ・パラ事業ではなかったもののメダリスト西山将士さんを招いて講演会を行い、昨年度は校内オリンピックや岡田隆さんによるリモート講演会などを行っている。その取り組みの目的と今年度の取り組みの内容を振り返るとともに、コロナの影響でオリンピック・パラリンピックが延期され、開催の可否について困惑を極めている日本の現状などを生徒と共に考えた。 1 学期当初にオリンピック・パラリンピックの開催の賛否について、生徒全体にアンケートしたところ、80%が否定的な意見であった。コロナにおける生徒一人一人の影響が非常に大きく、オリンピックを開催することによって生じる感染爆発や、それに伴って起こる行事の中止や部活動への影響、公式戦への影響など、生徒を取り巻く環境に非常に大きな打撃を与えることを懸念する様子を感じ取ることができた。 そのため、オリンピック・パラリンピックの歴史的意義、北九洲の企業の関わり、選手の思い、パラ選手との交流や他国の選手との交流を通して共生社会について考えるなど、開催の有無に関わらずオリ・パラを通して学んだり、考えたりできるように生徒たちのモチベーションをシフトチェンジしていった。

取組②

教育委員会から紹介をいただき、オリンピックのテコンドーに出場する、コロンビア代表選手とのオンライン交流会を行った。コロンビア選手の自己紹介、練習風景の見学、城南中学生からの質問コーナー、ウェルカムソング（きらきら星）の披露を行い、交流を深めた。生徒たちも実際にオリンピックに出場する選手との交流を経験することで、オリ・パラ開催を実感するとともにコロナの不安よりもオリ・パラへの興味や関心の度合いのほうが上回ってきたように感じた。



コロンビア国旗



ミニ国旗を振って挨拶



交流の様子

取組③

北九州の企業である(株)アステック入江に講演・実演会を開催していただいた。アステック入江は、都市鉱山から金を抽出する技術を開発し東京オリンピック・パラリンピックのメダル製作に技術提供をしている会社で、北九州世界体操・新体操や北九州マラソンなどのメダルも作っている世界的な技術を持つ会社である。そのアステック入江のスタッフが来校し理科室での「環境への取組」や「金の抽出実験」「銅の抽出実験」などに各クラスの代表が参加、その様子を全クラスに配信した。また、各クラスに世界体操・新体操のメダルも貸し出していただき、さらには質問コーナーや展示物会場もあり、オリ・パラを支えている北九州の技術力に触れることができた。この実演・講演会を通して、今までとは違った面からオリ・パラを見て、聞いて、感じる事ができた。



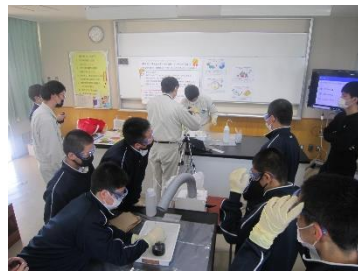
実験の様子



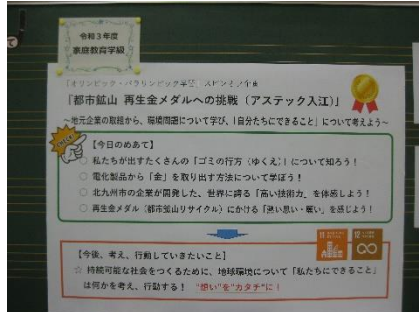
クラスでの様子



金の抽出実験①



金の抽出実験②



学級掲示①



学級掲示②



展示品



メダルをかけてポーズ

取組④

オリンピックメダリストの西山将士氏から「一般社団法人センターポールさん」を紹介していただき、パラアスリートオンライン講演会を開催した。車いすバスケットボールの植木隆人選手より、「今を生きる」をテーマに、障害を負うまでの経緯、障害を負った時の挫折感、どん底からの復活劇、車いすバスケットとの出会いなどを講演していただいた。質問コーナーでは、困難を乗り越えるための秘訣や心を強くする方法、上半身だけでシュートを打つ秘訣など様々な質問が出た。

植木選手の実体験を聞くことで、障害者理解、他者への理解、共生社会などに触れるよいきっかけとなった。

**北九州市立城南中学校
パラスポーツ交流授業**
2021年10月26日(金) 実施

2021.10.26 講演アスリート

植木隆人(うえきたかひと)
福岡県飯塚市出身

コート上ではスピードと俊敏性でチームメイトを生かし盛り上げる。関東選抜メンバーにも選ばれ全日本ブロック大会優勝にも大きく貢献。2014年には日本代表にも選出され、自身初となる国際大会に出場し銀メダルを獲得した。2018年には自分の力を試みたいと車いすバスケットボールの強豪国アメリカへ、「今を生きる」ことをモットーにいつどんなチャンスがあっても逃さぬよう日々成長を続けている。

主な競技成績

- 2015 北九州チャンピオンズカップ 準優勝
- 内閣府大臣杯争奪日本選手権 3位
- 2016 内閣府大臣杯争奪日本選手権 準優勝
- 全日本ブロック選抜大会 優勝
- 2017 北九州チャンピオンズカップ 優勝

※ハプニングがあり記録写真が撮れませんでした…。

取組⑤

オリ・パラ教育の集大成として学校行事である体育大会を生徒主体で企画・運営するという取り組みを試みた。

「生徒の生徒による生徒のための体育大会」を目標に「やって、見て、支えあって、学べる。体育大会を創造する。」をキャッチコピーに、まずは「Sports Festival Agency Jonan」(実行委員会)を立ち上げエージェ

ント（実行委員）を募集した。例年、委員会活動で係りを割り振ったり、学年の職員が学年競争遊戯を決めたり、招集や用具準備などを職員が行っていたが、そのすべてをエーエージェント中心に生徒全員が行うように工夫し、その分職員と生徒が一緒になって楽しめるようにした。

競技の内容についても生徒たちの意見が反映できるように、休み時間などのちょっとした会話の中から意見を拾えるようにエーエージェントに働きかけた。また、競技の中にも職員が活躍できる場を考えたり、ケガや体調面で競技に参加できない生徒の活躍の場を考えたりと多方面から視点を与え、みんなで楽しめる体育大会作りに向けて計画し、実施した。



オリジナル体操の様子①



オリジナル体操の様子②



担任も競技に参加①



担任も競技に参加②



保護者も学年競技に参加



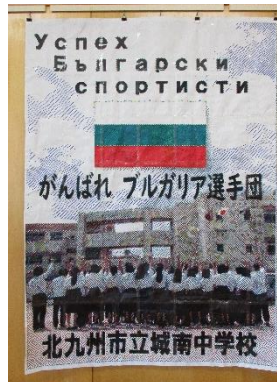
競技に参加できない生徒も活躍

取組⑥

オリ・パラ教育で培った「する、見る、支える、学ぶ」を生かし北九州で開催された世界体操・新体操の応援プログラムに応募し、学年ごとに応援モザイクアートを作成した。3年生は日本選手団、2年生はブルガリア選手団、1年生はエクアドル選手団に向けて作品を制作した。



3年生の作品



2年生の作品



1年生の作品

6 主な成果	取組①ではコロナの影響もあり社会的にオリンピック開催について否定的な意見が多く、生徒の中でもオリンピックは開催することは難しいといった意見が多かった。そのため、オリンピックの意義や、経済的な損失について学習し、オリンピック委員会の立場に立って、オリンピックを開催するためにはどのようなことが必要なのかを生徒たちに考えさせた。 オリンピックの開催が決まった時点で感染対策について学習したり、選手たちの思いはどうなのか、日々どのような努力をしているのかなど、選手の立場に立って考えさせたりもした。その結果オリンピック開催に反対していた生徒も、「不安はあるが選手たちの頑張りを応援したい」といった意見が増えていった。 取組②では実際の選手と交流し、その技をオンラインで見ることができた。生徒たちは「驚き」と「感動」を口にし、その技術の高さに興味津々だった。そして、選手たちのこれまでの思いを選手たちの口からきくことによってさらに「応援したい」「オリンピックを見てみたい」といった思いが強くなっていったように感じた。 取組③ではオリンピックを支える地元企業を知るとともに、「都市鉱山から金メダル」という驚きの取り組みを学習することができた。スポーツと科学のつながりというとても大きな「気づき」が生まれたと感じている。金は近い未来、なくなること、だからパソコンやスマホなどの電子機器から回収しようといった発想の転換が生徒にも刺激を与えていたと感じた。また「金」を身近なものから抽出する実験やそれに至るまでの企業の取組等を目の当たりにし、環境保全への意識が高まり、ほとんどの生徒が「物を大切にしていきたい」と思いをつづっていた。 取組④ではパラアスリート選手の実体験を聞くことができ、挫折、周りの支え、精神的な強さ、スポーツの力など多くのことを学ぶことができた。そして生徒が自分のことと置き換えて考える機会にもなり、これからの生き方、共生社会の実現について深く考える良い機会となった。 取組⑤では取組①の段階で何度も話し合った「オリンピックを開催するためにはどうするか」という課題が役に立った。自分たちで体育大会を計画し実施するにあたって、何度も話し合いを重ね、課題を一つずつクリアし、みんなの意見を形にしようと全員が協力して成功させた。生徒一人一人の活躍の場の設定について考え、保護者や先生たちも一緒に楽しむためにどうしたら良いかを考えたことで全ての人が楽しく過ごす時間を実現できたと考えている。
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	スポーツはするだけではなく見て、支えて、学ぶ。そういった多くの関わり方があることを生徒に実体験として感じてほしいと思いこのような取り組みを実施した。運動やスポーツが得意な生徒は自分から進んで参加するが、そうでない生徒は運動やスポーツを敬遠しがちである。そういった壁を少しでも取り除き、生涯を通じて健康に生きていくために運動に親しみ、運動っていいなと思える体験ができるように工夫した。 また、今年度の目的である共生社会については、コロナ選手との交流、パラスポーツ選手との交流を通じて国際交流、障害を抱えた方の生の声を聴くことができた。この経験を活かし他者を受け入れ、理解するとともにみんなが楽しめる体育大会の計画、実施に生かすことができたと考えている。 みんなの意見をどのように反映させ実現させるかという点に工夫を凝らし、生徒の生の意見を集められるように、各クラスのエージェントにメモ帳を配布し、どんなことでも決して否定せず、意見としてあげてほしいと念押しをして調査を進めた。安全面や、コロナの感染対策上すべての意見に答えることは難しかったが、生徒と共に考え試行錯誤しながら形作っていく過程に生徒の成長ももちろんだが、自分自身の成長も感じることもできた。

8 主な課題等	本校の場合は小規模校であるためスムーズに取り組を進めることができたが、取り組みを主導する教員のモチベーションと、そのバックアップ、周りの職員をどう巻き込んでいくかがカギであると考え。 年度当初はコロナ禍という事もあり、オリンピック・パラリンピック開催に対する風当たりが強かったため、この取り組みに対する生徒の見方も若干否定的であったのでそこから取り組みに持っていく過程に細かい手立てが必要であった。しかし、オリンピック同様、逆境からスタートし成果を生んだことは生徒にとって大きな経験となったと考える。
9 来年度以降の実施予定	今年度は、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業を進めていくにあたって、オリンピック・パラリンピックの開催の有無に関わらず生徒に還元できるようにと考えて進めてきた。そのため、保健体育に然り体育大会に然り、今年度実施したことを継続的に取り組んでいけるようになっている。 また、2022 年 2 月に北京で開幕する冬季オリンピック、2024 年のパリオリンピックなどことあるごとに授業で取り上げ、この平和の祭典が世界の伝統として紡いできた歴史やイズムを生徒たちに伝えていきたいと考えている。 そして、生涯にわたって運動に親しみ、健康で豊かな人生設計ができるように生徒やその家族に働きかけていきたいと考えている。